© Wild Bird Society of Japan
Strix
A Journal of Field Ornithology
Vol. 13, pp. 73-78, 1994

北海道南東部におけるオオジシギの生息状況

藤巻裕蔵
帯広畜産大学野生動物管理学研究室. 〒080 帯広市稲田町

日本における繁殖期のオオジシギ *Gallinago hardwickii* の主要な分布域は，本州中部以北である（日本鳥学会 1974，環境庁 1979）．このうち，本州では繁殖する個体数が減少しつつあり，日本版レッドデータブックでは希少種にあげられている（環境庁 1991）．このシギは北海道ではまだ普通に生息する種である（藤巻・赤坂 1987）．しかしこの種がおもに生息している平野部の開けた環境は，住宅地や農耕地などに開発されやすい状況にある．そのため，現在の生息状況を明らかにし，その変化をみていくことが今後の保護管理のためにも重要である．

ここでは，十勝地方と釧路地方でこれまでに得られた観察・調査結果にもとづき，分布の現状とおもな生息環境ごとの生息状況についてまとめた．

調査地および調査方法

調査地は十勝地方と釧路地方のほぼ全域にわたり，標高では海岸部から標高1,100mまでの範囲である．十勝地方の西部は日高山脈，北部は大雪山系，釧路地方の北部は雌阿寒岳，雄阿寒岳を中心とする山地，十勝地方と釧路地方の境界部は白糠丘陵で山地である．それ以外の部分は平野部で，とくに釧路地方南部には釧路湿原，東部には別寒辺牛湿原や霧多布湿原がある．平野部を流れるおもな河川には，十勝川，札内川，音更川，利別川，音別川，阿寒川，釧路川，別寒辺牛川などがある．

5万分1の地形図を縦横それぞれ4区分したものを1区画とし（約5×5km），このうち192区画で2kmの調査路を1～2か所設け，1978～1994年に調査した．調査した区画数は，十勝地方では北部，釧路地方では中部と東部で少なかった．

北海道ではオオジシギは4月20日前後に渡来し，9月中旬までには渡去するが（Fujimaki & Skira 1984），ディスプレー活動は7月になると急激に不活発になるため（新田・藤巻 1985），調査時期を4月下旬～6月下旬とし，この間に各調査路で1～数回のラインセンサスを行なった．また，この時期でも8時以降にはディスプレーが急激に不活発となるので（新田・藤巻 1985），調査時刻を夜明けから7時までとした．調査では，歩きながら出現したオオジシギすべての個体数を数えたが，同一区画で2回以上調査した場合には，最も多かった観察個体数をその区画の値とした．ディスプレーの活発さは夜明けから7時までにも徐々に低下するので（新田・藤巻 1985），各時間帯における調査結果

1994年12月9日受理
キーワード：オオジシギ，環境選択，生息状況，北海道

を6時前後のディスプレーが活発な時刻の調査結果に補正する必要があるが，いまのところオオジシギについてこの補正方法は確立されていないので，得られた数値をそのままもちいた．

調査路ぞいの環境をこれまで北海道で知られているオオジシギのおもな生息環境（Fujimaki & Skira 1984）と藤巻・赤坂（1987）が示した生息環境の概要を考慮し，次のように分類した．1）高木林で，常緑針葉樹林，針広混交林，カラマツ人工林などすべてタイプを含む，2）樹高2m以下の幼齢林，または伐採跡で，ところによっては林床にササ類が生育している，3）林（農耕地内残存林や段丘斜面の森林）と農耕地（畑，放牧地，採草地など）との組合わせ，4）農耕地，5）平野部の河川敷の発達する大きな河川ぞいで，おもに草地となっている，6）住宅地である．

以上の調査のほか，それ以外のときに得られた観察記録や橋本（1981）など文献の記録も分布図作成のための資料としてもちいた．

結　果

1．分布

オオジシギは十勝地方南西部と北部，釧路地方北部，白糠丘陵の森林帯を除き，両地方のほぼ全域で観察された（図1）．ラインセンサスを行なった192区画のうち，105区画

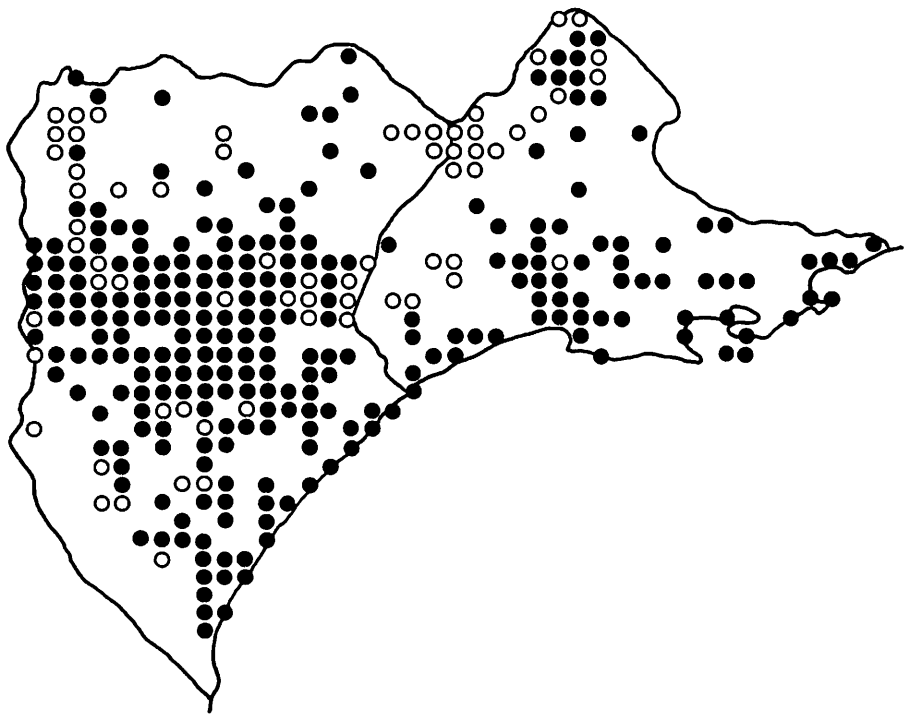

図1．十勝・釧路地方におけるオオジシギの分布（1978－1994）．丸は約5×5kmの区画を示す．
●＝生息確認，○＝調査したが，生息確認できず．

Fig. 1. Distribution of Latham's Snipes *Gallinago hardwickii* in the Tokachi and Kushiro districts in 1978－1994 by 5-km quadrats. ●＝occurrence, ○＝no sightings.

表1．十勝・釧路地方における環境別・標高別のオオジシギの出現区画数（%）．
Table 1. Numbers of quadrats (%) in which Latham's Snipes were recorded in different habitats and altitudes in the Tokachi and Kushiro districts in 1978－1994.

	調査区画数 No. of quadrat surveyed	標高 Altitude (m). 0-100	101-200	201-300	301-400	401-500	501-600	601-	計 Total
高木林 Mature forest	56	0	0	0	0	0	0	0	0
幼齢林・伐採跡 Young stand or clear-cut area	11	−	1(33)	3(60)	1(50)	1(100)	−	−	6(55)
森林・農耕地 Agricultural land with wood	25	4(80)	5(63)	5(83)	3(75)	1(50)	0	−	18(72)
農耕地 Agricultural land	85	28(80)	23(74)	15(94)	2(100)	1(100)	−	−	69(81)
河川沿い Riverine area	12	8(100)	4(100)	−	−	−	−	−	12(100)
住宅地 Residential area	3	0	0	−	−	−	−	−	0

(55%) でオオジシギが記録された．しかしオオジシギが観察されなかった区画でも，同じ区画の別の場所や別の機会に観察されている場合には，分布図で生息するとしているので，図1に示した生息区画数はラインセンサスの結果より多くなっている．

生息環境別にオオジシギの出現率をみると，最も高かったのは大きな河川ぞいで，全ての区画で出現した．ついで，農耕地で81%，林・農耕地で72%，幼齢林や伐採跡で55%であった（表1）．これらのうち，河川ぞいの出現率は幼齢林・伐採跡における出現率より有意に高かったが（Fisher の正確確率検定，$P=0.027$，両側検定），それ以外の環境のあいだでは有意な差は認められなかった（$P>0.05$）．一方，高木林と住宅地の区画でオオジシギはまったく観察されなかった（表1）．

標高でみると，オオジシギは500m以下で記録された（表1）．それぞれの環境でオオジシギが観察された最も高い標高は，幼齢林・伐採跡では460m，林・農耕地では430m，農耕地では460m，河川ぞいでは180mであった．調査した区画のうち標高500mにあったのは高木林だけで，オオジシギが観察された環境のある区画は全て500m以下にあったため，このような垂直分布となった．

2．生息数

2 kmあたりで観察された個体数は，0－9羽の範囲であった．環境別にみると，最も多かったのは河川ぞいで4.8±2.9羽（平均値±SD，以下同様），ついで農耕地1.8±1.4羽，林・農耕地1.2±1.0羽，幼齢林・伐採跡0.6±0.5羽で，これらの平均値の差は有意であった（Kruskal-Wallis の検定，$H=26.867$，$P<0.01$）．

考　察

十勝・釧路両地方でオオジシギは，都市と山地の森林帯を除きほぼ全域で観察された．1984，1985両年に北海道各地で鳥獣保護員が行なった調査結果（藤巻・赤坂 1987）によ

ると，オオジシギが観察されなかった区画の割合は海岸部と中央部山地で低く，平野部で高い傾向がみられたが，今回の結果では海岸部で出現率が低いということはなかった．藤巻・赤坂（1987）の報告で，とくに海岸部で出現率が低かったのは渡島半島であったが，この地域では山が海岸近くまでせまっている部分が多いためであろう．

標高では，オオジシギが観察されたのは500m以下であったが，これは結果で述べたように，高木林以外の環境が標高500m以下にあったためである．大雪山系では化雲岳ヒサゴ沼（標高1,700m），五色ケ原（標高1,600－1,800m），沼の原（標高1,420m）のような高山草原帯でも観察されており（小川 1971，川辺 1985），標高が高い場合でも草原のように開けた環境があれば少数が生息している．

ここでは，約5×5km（1/2.5万地形図の1/4）を1区画として分布を示した．これまで同様のメッシュ法でオオジシギの分布を図示したものはあるが，1区画の大きさは1/5万地形図（環境庁 1979）または1/2.5万地形図（藤巻・橋本 1987，藤巻・赤坂 1987）であった．今回の区画はこれらのより小さいため，山地の森林帯でも小規模の農耕地，幼齢林，伐採跡のような開けた環境があると，オオジシギが分布することを示すことができた．そのため，山間部では分布がモザイク状になっている地域も見られた．

上述のように，オオジシギは都市や山地の森林以外の環境にはほぼ生息しているが，観察個体数は河川ぞいで最も多く，幼齢林・伐採跡や林・農耕地で少なかった．藤巻・赤坂（1987）によると，3kmあたりの平均観察個体数は河川ぞいで3.6羽，平野部で2.8羽，山間部と海岸地域で1.8羽で，河川ぞいで多くなっている．環境別の観察個体数から判断すると，十勝・釧路地方では河川敷のような環境が，オオジシギにとって最も好適であると考えられる．しかし，最近河川敷では，とくに都市部でゴルフ場や各種スポーツ施設がつくられており，オオジシギをはじめ，草原性鳥類の好適な生息環境が少なくなる傾向にある．しかし，オオジシギにとっては農耕地が河川敷に次ぐ生息環境であり，また農耕地内の残存林でも立木密度が疎であるとオオジシギが繁殖できる（Fujimai & Skira 1984）ことを考慮すると，今後開発が進み河川敷のような自然条件に近い環境が減少しても，オオジシギの生息環境が完全に消失することにはならないであろう．ただし，農耕地のような人工化された環境では，生息密度が低くなることは避けられない．

釧路・十勝地方では，湿原を除くと平野部の多くは農耕地や住宅地として開発されており，自然環境が比較的よく残されているのは河川敷くらいである．現在十勝川中・下流部の河川敷は，潅木・草原性鳥類の好適な生息環境になっており，とくに下流部の鳥相は釧路湿原とよく似ていた（藤巻 1989，1994）．上述のように，現状ではオオジシギの生息環境が消失する可能性は少ないが，この種を含め潅木・草原性鳥類の生息環境を維持する上で河川中・下流部の河川敷の保全が重要である．

要　約

1978～1994年に北海道十勝地方と釧路地方でオオジシギの生息状況を調べた．

おもな生息環境は平野部では大きな河川ぞい，農耕地，山間部の森林帯では幼齢林や伐採跡であった．約5×5kmの区画192か所におけるオオジシギの出現率は，河川ぞい100%，農耕地81%，林・農耕地72%，幼齢林・伐採跡55%で，都市と高木林では観察されなかった。オオジシギが観察された区画は，いずれの生息環境でも標高500m以下であった。観察路2kmあたりの観察個体数（平均値

±SD）は，河川ぞい4.8±2.9羽，農耕地1.8±1.4羽，林・農耕地1.2±1.0羽，幼齢林・伐採跡0.6±0.5羽であった。オオジシギにとっては大きな川の河川敷が好適な生息環境となっている．

引用文献

藤巻裕蔵．1989．北海道十勝地方の鳥類 5 十勝川下流沿いの鳥類．山階鳥研報 21：76－83.

藤巻裕蔵．1994．北海道十勝地方の鳥類 6 十勝川中流沿いの鳥類．山階鳥研報 26：68－76.

藤巻裕蔵・赤坂猛．1987．北海道におけるオオジシギの生息状況（1984，1985年）．鳥獣行政 22（1）：23－24.

藤巻裕蔵・橋本正雄．1987．十勝と釧路の野鳥，釧路地方鳥類目録．日本野鳥の会十勝・釧路支部，帯広.

Fujimaki, Y. & Skira, I.J. 1984. Notes on Latham'ssnipe *Gallinago hardwickii* in Japan. Emu 84：49－51.

橋本正雄．1981．釧路管内鳥類観察記録（1）1971－1980．釧路博物館紀要（8）：47－58.

川辺百樹．1985．大雪山の動物 11 オオジシギ．ひがし大雪だより（14）：1－3.

環境庁．1979．第2回自然環境保全基礎調査動物分布報告書（鳥類）全国版．環境庁，東京.

環境庁．1991．日本の絶滅のおそれのある野生生物 脊椎動物編．日本野生生物研究センター，東京.

日本鳥学会．1974．日本鳥類目録改訂5版．学習研究社，東京.

新田和弘・藤巻裕蔵．1985．繁殖期におけるオオジシギの日周活動の季節変化．鳥 34：49－55.

小川巌．1971．大雪山・高山帯の鳥類について．信大農野外生物研究会報（2）：26－37.

Distribution and abundance of the Latham's Snipe in south-eastern Hokkaido

Yuzo Fujimaki

Laboratory of Wildlife Ecology, Department of Agro-Environmental Science, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine, Inada, Obihiro 080

Latham's Snipes *Gallinago hardwickii* were counted along 2-km line transects in 192 5 × 5 km quadrats in the Tokachi and Kushiro districts, Hokkaido, from late April to late June, 1978－1994. Based on the line transect census data and the records previously obtained, Latham's Snipes occurred mainly in riverine and agricultural areas below 500m above sea level. Of 192 quadrats censused, Latham's Snipes were recorded in all the riverine quadrats, 81% of agricultural lands, 72% of agricultural land with isolated woods, 55% of young plantations and forest clearings, but not in mature forests and residential areas. The number of birds (mean ± SD) counted per 2-km transect were 4.8 ± 2.9 in riverine habitats, 1.8 ±1.4 in agricultural land, 1.2 ±1.0 in agricultural land with isolated woods, and 0.6 ± 0.5 in young plantation and forest clearings. These results indicate that riverine and adjacent areas are primary habitats for Latham's Snipes.

Since Latham's Snipes are fairly commonly found in agricultural lands, there is a prospect that their secondary breeding habitat will remain in large areas in Hokkaido.

Key words: breeding distribution, breeding habitat, Gallinago hardwickii, *Hokkaido*